LA 立教会だより

Volume 3, Issue 6 www.stpaul-la.com February 2010

St. Paul's Rikkyo University Alumni Club at Los Angeles

会長からのメッセージ

孫　恵美
昭和 43 年史学科卒

新年明けましておめでとう御座います。
三月の総会後、新しい会長の下での 2010 年、LA 立教会が校友たちの親睦と、母校の発展の為、さらに前進されますことを、お祈りいたしております。

09 年 10 月には、校友の堀田紀眞さん(S39 社会)が 08 年についで LA を訪れ、第二回日米交流ロサンゼルス朗読会が、小東京図書館でおこなわれました。今年、2010 年には若柳久三事渡辺喜久子さん（S.41 日文）とのコラボレーションという新しい試みで、＜舞と朗読の平家物語＞が LA 立教会・AAJUW 共催にて、6 月 13 日(日)小東京の禅宗寺で公演されます。校友達の活躍を応援いたしましょう。
2009 年 10 月 25 日には、卒業 50 周年の会にご出席の上井貴代子さんとご一緒に、ホームカミングデーに参加してまいりました。2008 年に引き続きクリスマスクラフトを販売し、立教大学創立 135 周年基金に LA 立教会より 5 万円寄付をしてまいりました。
11 月末には Town & Gown の会を例年通りいたしました。すでにウエブサイトでご存知と思いますが、クレイアート講師小林陽子さん(H.8 史)よりバラのブローチを教えていただいた後、ポットラックでの楽しい一日となりました。

会員の笹田周さん(H.1 英)がニューヨーク転勤となりました。Aliso Viejo にお住まいの槇弘子さん(S. 50 仏文)が新会員となられました。皆様の周りに校友がいらっしゃいましたら是非 LA 立教会にお誘いください。

2 月 22 日から 28 日まで立教大学硬式野球部が総勢 80 数人、大塚新監督と共に LA にまいります。又、立教大学校友会会長江草忠敬氏ご夫妻も同時期に LA 立教会を訪問されます。校友会会長と野球部の歓迎会を 2 月 27 日(土)11 時半より 2 時まで Lawry's で行いますので、今から予定の中に組み入れておいて下さい。貸切ですので大勢の校友、ご家族、ご友人のご参加をお願い申し上げます。又、今回遠征での試合は UC Irvine と USC の 2 校です。出来る限り多くの方に観戦、応援していただきたいです。試合予定および場所については、お知らせ部分をご覧下さい。

あっという間でした。沢山のことを学ばせていただきました。3 年にわたる会長職の間、私の至らないところをいつもサポートしてくださり、励まして下さいました役員の方々、そして先輩、後輩の校友の方々に厚く御礼申し上げます。役職は辞しますが、母校立教の為に、私の出来る事を出来る範囲でお手伝いいたしたいと思っております。これからも宜しくお願いいたします。
感謝を込めて、最後の会長挨拶文といたします。有難うございました。

CALENDAR OF EVENTS

立教大学野球部アメリカ遠征
<Tour Schedule>
02/23 Game at University of California, Irvine (6:00 pm)
02/24 Game at University of Southern California (6:00 pm)
02/25 Reggie Smith Baseball Center
~26 －Batting & Pitching Session－
02/27 LA Rikkyo Kai Welcome Reception at Lawry's
02/28 Game at Fresno Pacific University (5:00 pm)
03/01 Reception by UJCC, Fresno-Kochi Sister City Committee, Nisei Baseball Research Project
03/02 Game at Stanford University (2:30 pm)
03/03 Game at University of San Francisco (2:00 pm)
03/04 SF Rikkyo Kai Welcome Reception at Swiss Luis

野球部歓迎会
Date: 2 月 27 日(土曜日)
Place: Lawry's Beverly Hills

LA 立教会 2010 年度総会・親睦会
Date: 3 月 28 日(日曜日)
Place: San Antonio Winery

舞と朗読の平家物語
Date: 6 月 13 日(日曜日)
Place: 小東京禅宗寺

INSIDE THIS ISSUE

会長からのメッセージ	~孫 恵美	1
立教史散歩「Who Will Shine Tonight?」	~ 山中一弘	2
移住・カフェザールでの生活	~玉城良一	4
ギリシャ神話の世界へのクルーズ	~ワイス典子	8
クルーズ：バルト海の旅	~草野レクサ泰子	9
Town & Gown 主催「クレイアートの会」レポート	~谷上知美	10
海外立教会から ~メルボルン立教会	~佐藤裕喜	10
<お知らせ>		10
編集後記	~坂本計洋	10

立教史散歩

今宵誰が輝く― Who Will Shine Tonight?

山中一弘（昭和 53 年法学卒）
〈2002 年 6 月 1 日発行（雑誌「立教」第 181 号）より転載〉

立教学院史資料センターによる本誌連載「立教史発掘」は、今年度から「立教史散歩」といささか軽快なタイトルにあらため、より自由に立教史の中からさまざまな話題を拾ってお伝えしていくことにする。

※

神宮の杜に縦縞のユニフォームが躍る初夏。学生応援席に轟く立教大学第二応援歌「セント・ポールズ・ウィル・シャイン・トゥナイト」は、英語による応援歌として異彩を放ち、古くから立教関係者以外の耳にも馴染んでいる。しかし流布しているこの歌の楽譜に、作詞・作曲者名の記載はない（譜例１）。

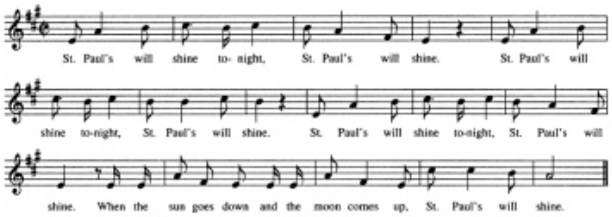
今回のテーマは、この曲の由来をめぐる“散歩”である。

（譜例 1）

第二応援歌「St. Paul's will shine tonight」

1. St. Paul's will shine tonight,
St. Paul's will shine.
St. Paul's will shine tonight,
St. Paul's will shine.
St. Paul's will shine tonight,
St. Paul's will shine.
When the sun goes down
and the moon comes up,
St. Paul's will shine.

2. St. Paul's will shine tonight,
St. Paul's will shine.
Will shine in beauty bright,
All down the line.
Won't we look neat tonight,
Dressed up so fine.
When the sun goes down
and the moon comes up,
St. Paul's will shine.



「フレスノ野球団」が伝えた

従来この曲「伝来」の経緯については、「当事者」である故七海久氏（昭和四年商学科卒）の証言（「セントポール・ウィル・シャインの由来」「セントポール」第八八号・一九五九年二月発行／季刊「立教」第三二号・一九六四年四月発行に再録）がほぼ唯一の頼りであった。

氏の証言を要約すれば以下のようになる。

昭和三（一九二八）年四月、アメリカ・カリフォルニア州の日系二世を主力とした「フレスノ野球団」が来日し、都下の各大学と試合を行なった。そのメンバーはバスケットもこなすので、特に頼んで立教大学に来てもらい、立教大学バスケットボール部と親善試合を行なった。明治大学・松本滝蔵氏の案内で、キャプテンは銭村君であった。試合後、ポール・ラッシュ教授の厚意で「構内五番館」でティー・パーティーが開かれた。そこでエールの交換に「フレスノ野球団」が「リッキョー・ウィル・シャイン」を合唱してくれ、立教チームが「フレスノ・ウィル・シャイン」と返した。これを自分たちバスケット部員がことあるごとに歌い広めた。―

なお、後にラッシュ教授とブランスタッド教授が「リッキョー」を「セント・ポールズ」に変えて立教中学校の音楽教材としたため、「セント・ポールズ・ウィル・シャイン……」として広く立教生に浸透したとの証言が、故小川徳治氏（昭和四年卒、元本学教授）による、七海証言への「附記」として「立教」に掲載されている（季刊「立教」第三二号）。

従来、本学の宣伝広告や出版物にも右記の経緯が無批判にほぼそのままの形で使われており、さらには「フレスノ野球団」を「フレスノ大学の学生」などと「解釈」しているケースも見受けられる。実はかつて広報課に在籍した筆者もそれに積極的に荷担した一人で、今回これにいくばくかの修正と追加を試みることで、遅れ馳せながら罪滅ぼしをしようともくろんでいる次第である。

ポイントは次の二点である。

まず「フレスノ野球団」とは何なのか。

そして「フレスノ・ウィル・シャイン・トゥナイト」の原曲は何なのか。

昭和三年ではなかった

「フレスノ」はカリフォルニア州中部の都市フレズノ（Fresno）のことであろう。同地には現在カリフォルニア州立大学フレズノ校、カリフォルニア大学サンフランシスコ校の一部、フレズノ・パシフィック大学、フレズノ・シティ・カレッジなどの大学がある。しかし、「フレスノ大学」の名に相当しそうな大学は見当たらない。では「野球団」はどこのチームなのか。

当時の「立教大学新聞」にヒントがあった。

同紙には「フレスノ野球団来朝、本学も対戦せん」という見出しで次の記事が出ていた。

「予て来朝のうわさのあったハワイに於ける邦人中の最強チームフレスノ野球団は愈々明大野球部の招聘に依りて銭村主将以下来る三月三十一日横浜入港のコレヤ丸で来朝することに決定した。同野球団は早大をのぞく東都五大学と対戦する筈である。同一行には優秀なる篭球選手五名もいるので之等篭球選手も本学を始め早商帝等の大学とも対戦することになっている。」（「立教大学新聞」昭和二年二月五日／新字・新かなに変更）

お気づきだろうか。

チームの来日は、七海氏の言う昭和三年ではなく、昭和二（一九二七）年であった。

ハワイ云々は単純な間違いであろうが、「フレスノ野球団」が在米邦人のチームであることは、七海氏とこの記事が証言している。ではこの在米法人チームの正体は何なのだろうか……。現在フレズノに本拠地を置くＡＡＡ野球チーム Fresno Grizzlies のウェブ・サイト（ホーム・ページ）に次のような記述が見つかった。

「フレズノには第一次世界大戦の始まった一九一四（大正三）年以来プロ野球チームは絶え、一九四一（昭和十六）年まで戻ってこなかった。しかしその間隙を縫うように、セミプロ野球が同地に花開いた。その中に、Fresno Japanese Athletic Club（フレズノ日系人体育クラブ）が作った強力なチームが California State Japanese League（カリフォルニア州日系人リーグ）に属して活躍していた。」

（http://www.fresnogrizzlies.com/）
更に、Nikkei Baseball Research Project（日系野球調査プロジェクト）というアメリカのＮＰＯが運営するサイトには、来日チームの主将「銭村君」とおぼしき人物ケンイチ・ゼニムラが紹介されている。
「一九〇〇年広島に生まれハワイで育った銭村は、二〇年にフレズノに移り、レストランで働きながら、Fresno Nisei Baseball Team（フレズノ二世野球チーム）を組織し、更には十チームの二世リーグまでを創設、“カリフォルニア日系野球リーグの父”と呼ばれている。彼のオールスターチーム Fresno Athletics はその強さでカリフォルニアの大学チームをも圧倒し、一九二四、二七、三七年には日本、韓国、満州を訪れた。日本では六大学相手に四十勝八敗二分の成績を残した。」（http://www.niseibaseball.com/）
昭和二（一九二七）年来日した「フレスノ野球団」は、このチームであると見てよいであろう。

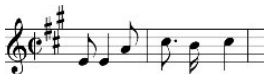
どこにでもある歌

では「セント・ポールズ……」の元歌は「フレスノ野球団」オリジナルの応援歌なのだろうか。
実は私は、かつてテレビで観たアメリカ映画「ベニー・グッドマン物語」（The Benny Goodman Story 一九五五年）の中で、大学生の合唱団が歌詞は違うが正にこの曲を唱っているのを見聴きして以来、これはどうやら比較的一般的なアメリカの歌らしいとの感触を得ていた。
それから数十年この謎は棚上げになっていたのだが、先日本学の大橋英五総長あてに送られて来たテープが私のこの遠い記憶を呼び覚まし、本稿をものするきっかけをもたらしてくれた。
テープは総長の友人Ｋ氏から送られたもので、Ｋ氏もその友人から送られたのだという。内容は、かつて合唱団や楽団を率いて一世を風靡したミッチ・ミラー（Mitchell William Miller, 一九一一・）の合唱団が演奏する「アワー・ボーイズ・ウィル・シャイン・トゥナイト」（Our Boys Will Shine Tonight）であった。

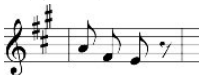
Our boys will shine tonight,
Our boys will shine.
Our boys will shine tonight,
All down the line.
They're all dressed up tonight,
Don't they look fine.
When the sun goes down
And the moon comes up,
Our boys will shine.

と、「セント・ポールズ」と良く似た歌詞をもったこの曲、冒頭の四音が「セント・ポールズ」はミ・ラ・シ・ドであるのに対してミ・ミ・ラ・ド（譜例２）と歌われている点と、後ろから三小節目（moon comes up の部分）のリズムが「セント・ポールズ」は八分音符・四分音符・八分音符であるのに対して八分音符三つに八分休符一つ（譜例３）である点が異なるだけで、全体としてはほぼそっくりである。
時代の古さを反映してか若干低いピッチながら、調も同じイ長調だ。

（譜例 2）



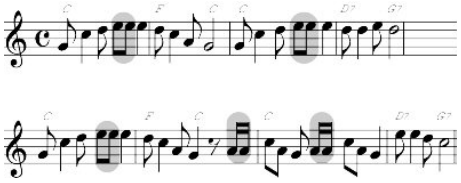
（譜例 3）



「アワー・ボーイズ」を探して

「セント・ポールズ・ウィル・シャイン」や「フレスノ・ウィル・シャイン」の原曲はこの「アワー・ボーイズ・ウィル・シャイン・トゥナイト」なのかもしれないという□当たり□を付けた筆者は、学問的体力的時間的な不足を補うべく、さらにインターネットを駆使して世界中から（？）情報を収集した。
まずはこの曲を収録している媒体が、これでもかとばかりに見つかった。
アメリカで出版されているハーモニカ、バンジョー、マンドリン、ウクレレ、ピアノ、吹奏楽など、各種楽器やバンドの楽譜、教則本、教則ビデオ、そして歌集やＬＰ、テープにＣＤ……。
中でも Jim Bottorff's Banjo Page というバンジョーに関するウェブ・サイトでは、同曲の模範演奏をパソコン上で聴くことができる。
それは「セント・ポールズ」ともミッチ・ミラー版とも部分的に違う音が混じっているものの、紛れもなく同じ曲と認識できるものであった（譜例４）。
（http://www.jbott.com/begin.html）

（譜例 4）



残念ながらこれらの楽譜や教則本などには、この曲の作詞者、作曲者についての情報は見当たらなかった。
ただ、一部に Trad. つまり「口伝、読み人知らず」である旨の記述が見られること、この曲を収録した歌集、楽譜集、ＣＤ等が「アメリカ民謡集」「アメリカ開拓者の歌」などといった趣旨やタイトルで纏められていること、さらに、伝承者によって少しずつメロディが異なっていることなどの事実は、この曲が昔からアメリカの人々の間で歌い継がれてきたものであることを示唆していると言えよう。

誰が輝く？

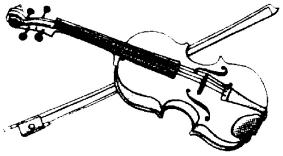
次に多く行き当たったのが、学校のウェブ・サイトである。
アメリカの学校の応援歌として使用されているケースがぞろぞろ出てきたのだ。
例えばウィスコンシン州ミルウォーキーにあるベイ・ビュウ・ハイスクール（Bay View High School）の応援歌「ベイ・ビュウ・ウィル・シャイン・トゥナイト」（Bay View Will Shine Tonight）。
その歌詞は、
Bay View will shine tonight,
Bay View will shine,

Bay View will shine tonight,
All down the line,
Bay View will shine tonight,
Bay View will shine,
When the sun goes down
And the moon comes up,
Bay View will shine.

と「セント・ポールズ」に酷似している。

このほか、インディアナ州ホバート・ハイスクール（Hobart High School）のホバート・ブリッキー・ファイト・ソング（Oh, Our Team Will Shine Tonight）、メリーランド州フレデリック・ハイスクール（Frederick High School）のファイト・ソング（Our Boys Will Shine Tonight）、イリノイ州シカゴのシカゴ大学（University of Chicago）の応援歌（Chicago Will Shine Tonight）、ヴァージニア州レキシントンのワシントン・アンド・リー大学（Washington and Lee University）の応援歌（W-L Will Shine Tonight）など、さまざまな高等学校や大学の応援歌が、「アワー・ボーイズ」および「セント・ポールズ」の歌詞と酷似した構造と内容をもっていることが分かった。

同様の歌詞の酷似は、「アワー・スカウツ・ウィル・シャイン・トゥナイト」（Our Scouts Will Shine Tonight）などのタイトルで、アメリカ国内のボーイ・スカウトのキャンプ・ソングにも見られる。



南北戦争の歌？

総長室ドノヴァン先生のご教示で、ケリー・ミルズという作曲家の作品「ジョージア・キャンプ・ミーティング」（Georgia Camp Meeting, 一八九七年作曲）にまで「案内」されたときは、パソコンの捜査能力につくづく感心させられた。

この、一見「セント・ポールズ」や「アワー・ボーイズ」とは何の関係もなさそうな曲についての解説が、Basin Street Press なるカリフォルニアの出版社のサイトにあった。

それはケイクウォーク（ダンス音楽の一種）の歴史を記述した文章の一節で、ミルズの同曲が作曲当時の大ヒット曲であり、実は南北戦争の歌（Civil War Tune）「アワー・ボーイズ・ウィル・シャイン・トゥナイト」を基にして作られたものである、と記されているのだ。
（http://www.basinstreet.com/）

これはもちろん一出版社のホームページ上の記述であり、南北戦争云々については他に確かな証拠を見つけることが出来なかったので、単純に信じる訳にはいかないのは言うまでもない。

ただ、「ジョージア・キャンプ・ミーティング」が「アワー・ボーイズ」に基いていることについては、「ジョージア…」を収録したピーターソンズ・オリジナル・ラグタイム・バンド（Peterson's Original Ragtime Band）のＣＤ "Pleasant Moments" の曲目解説にも言及されている。
（http://www.groversmith.com/cddisk.html）

ケリー・ミルズ（Frederick Allen "Kerry" Mills, 一八六九・一九四八）は、ティン・パン・アレーの作曲家で、多数のケイクウォークその他ポピュラー音楽を作曲した。中でも「ジョージア…」は代表的なヒット作だったようだ。

ミルズがどのように「アワー・ボーイズ・ウィル・シャイン・トゥナイト」を料理したかは、アメリカ合衆国議会図書館のサイトで楽譜を見、実際に音を聴くことが出来る（譜例５はこれを採譜）ので、どうぞご確認頂きたい。古いアメリカが匂い立つようなフィドルの音の洪水から、耳馴染んだ「セント・ポールズ」のメロディを聴き取ることも、そう困難ではないだろう。
（http://memory.loc.gov/ammem/hrhtml/hrhome.html）

（立教学院史資料センター）

移住・カフェザール（コーヒー畑）での生活

玉城良一　（昭和 31 年文社卒・サンパウロ立教会会長）

移住と言うものは、横浜での友人たちとの別れ（勿論“ガールフレンド”とも）、に始まり、どの様な気持ちで船に乗ったか、38 日間の船旅でいかに諦め気持ちを切り替えたか。

移住者としての始まりは、
「着きましたよ、さあ降りてください」と言う、出迎えてくれた安藤さんの声で眠りから覚め、急いで荷物をまとめ、ジャルジネイラと呼ばれる窓ガラスの無い、大きな荷物（動物ー豚、鶏、何でもあり）は全て屋根の上に乗せ、日本でさえあまり目にする事の無くなった、エンジンルームが車の鼻先のように前にでっぱった古い物。着いたと言われても、いくら周りを見回しても其れらしい家も無く、360 度見渡す限りの整然と植えられたコーヒー（あとで判る）の木ばかし。人陰さえ見当たらない地平線まで続くコーヒーの木。成るように成れと開き直ればもう怖い物は何も無い。何処までも続くコーヒー園の中を走る一本の砂地の道をそれて、細い道に入るとポルトン（扉）と呼ばれている大きな木の門。片側の門をはずすとギーと言う大きな音を立てて片側に開く。通り過ぎたら必ず閉める事との注意有り。家畜が勝手に逃げ出さないようにとの事。なるほどそうかと、妙に感心しながら足元は角材を 5cm くらいの間隔をあけて横に敷き詰められてあるのを見て、又疑問。何故？其れも、動物が足が挟まるのをきらい、通り越せない様にと工夫された物らしい。「一つ勉強だね」との小さい弟の声に、「そうか、此れからは、全てこいつ等の様に前向きに行かなければ駄目か」と反省。歩く事 500m くらいでしょうか、坂道を下った遥か下の谷間を利用した住宅が見え始める。最初は住宅と思ったが、家は家でも昔から有るコーヒー労働者用の奴隷小屋だったのだ。「此処があなた方の此れからの棲家です」と言われて入って見ると、外見は確かに四角く板囲いされ屋根も瓦葺、入り口の扉は上下二段に切り分けられてあり、「誰か来た時には先ず上

を開け、確認をしてから下も空けて招き入れるように」との注意事項。此処で又一つ勉強。入り口の 3、4 段の階段を上がり、中に入り吃驚。仕切りも何も無い空間が其処にどかんと広がっていた。床なんてそんな物は無く土を突き固めただけの物。先ず妹が悲鳴を上げた。17 才の娘盛り。此処で彼女は即刻一人でも帰る覚悟をしたらしい。

其れからが大変であった。勿論持ってきた引越し荷物はまだサントスの港にあるだろうし、到着までは約一週間掛かるでしょうと言われてきているし、今夜から如何して寝るかとの心配。安藤さん曰く「直ぐに材木と道具を貸すから、それで寝るところを作ればよい」と気楽な物。「便所は何処」とチビたち。「裏にあるよ」とのこと。それらしき物は見当たらない。妹に「お兄ちゃんどうにかしてよ」と言われ、探しに行く。其れらしき小屋を発見。覗いて見ると確かに其れらしい匂いがした。「おおいあったぞ」と言うと、チビたちが早速飛び込むが、直ぐに飛び出てきて「違うよ」と大騒ぎ。「便器も何も無いよ何処にするの、、、、、」妹曰く「下から蛇でも出てきたら如何するのよ。」兄貴、仕方がなしにためしに入って用を足してみる。深く掘られた穴の上に板を 3 枚たてに並べてあり、其の真ん中の一枚に穴が開いていて、此処にして下さいと言うことらしい。なんともはや、我々はタイムスリップをして、其れこそ弥生時代にでも来てしまったような感覚。「一杯になったら如何するの」とチビ。安藤さん曰く「早く此れを一杯にするように、一生懸命に働いて沢山御飯を食べて沢山出しなさい。しかし、此れを一杯にするには多分 7−8 年以上掛かるよ。そうしたら、又、他の所に深い穴を掘ってあげるから大丈夫」と言われ、チビたちも納得。しかし、この便所と井戸の位置関係で其の後ひどい目にあうとは予想もしなかった。生水を飲みアメーバーセキリに罹る。

それから一週間は、其れこそ原始時代のような生活をした。夜はコーヒー殻を敷き詰めた上にシートをかぶせ、コーヒー袋＝ジュート麻（ちくちくしてとてもじゃないけれど肌にはつけられない）、砂糖袋、うどん粉袋（この二つは綿で出来ており漂白をされているので洗いざらしでも清潔感があった）此れを被り、上を見ると瓦の隙間から、ちらちらと見える星を眺め。誰が何のためにこのような試練を与えてくれているのか、むなしいなと当時は心から人生の果なさを痛感。何のために、誰のために、俺はここに居るのかと腹を立てる。しかし、其の全てを忘れさせるような言葉が母親から出た。 「ああ、此れでやっと家族だけの生活が出来るのね。」 この一言で、やはり来た事が間違いではなかったんだと自分自身に言い聞かせ、区切りをつけて新しい人生を始める事が出来た。其の母も、親父も、今は遠い旅立ちをしてしまった。あるいは、又、何処かで一緒になっているかも知れない。多分、母親には嫌われてしまっているでしょうけれど、この本等に強かった母親に付いては、別に如何しても書いて置きたいので、何時か別書します。

（1950 年代のブラジル丸）

涙と言えば、あの日本との別れの日、俺は涙を流しただろうか？恋人が、友達たちが、皆泣いて別れを惜しんでくれてはいたけれど、自分には流す涙など無く、むしろ平然とそれらの人たちを眺めていたのでは無いか。ただ船が岸壁を離れ、見送りのテープが全てちぎれて海に浮かびながら、何処までも自分の心の中の様に、何時までも何処までも着いて来る。何かじっと痩せ我慢をしている自分の心の中を見透かされて居る様で情け無く、何故もっとはっきりと、恋人に、そして、皆に、「俺は皆以上に悲しいんだぞ」、と素直に涙を見せられなかったんだろう。其の我慢も、船が港をはずれ、本牧の岬の先をかすめ根岸湾に差し掛かり、あの懐かしい東伏見宮の別邸（後のプリンスホテル、此れも今は無いらしい）その下の禿山、ひばり御殿、我が家の有った海岸沿いに並ぶ間坂の家々を眺めていたら、もうどうしようもなくなり、右舷にたたずみ、今までどんな苦しい事があっても流した事が無いような涙を、思い切り流し、恥も外聞も無く大声を出して泣いた。《今も此れを書きながら感情が高ぶり PC に向かいながら涙を流している》1957 年 5 月 3 日、満 26 歳に成る 3 日前の事。それから 38 日間の船旅。色々な催しを考えてくれ、移住者を慰めてくれる船会社側の好意に感謝しながら、Los Angeles、Panama、Venezuela＝Caracas、Brazil に入り、アマゾン移住者の降りる Belem、Recife と寄港しながら、6 月 11 日早朝、目的地サントス港に到着した。

其の日は、朝早くから希望に満ち、と言えばなんか格好が良いけれど、内心は、此れから暮らす事になる国への不安感の方が強かった。横浜で別れを告げた同じ右舷に、Belem を過ぎてからずうっと見続けている陸地、陸地、此れが全て此れから身を任せようとしているブラジルと言う国かと思うと、圧倒されてしまい言葉が出なかった。いよいよ最後の朝、手の届きそうな近い海岸線に立ち並ぶ高層ビル群、Guaruja と言うサンパウロの海岸の一級のリゾート地だと後で知る。其れを過ぎ、岬をぐるりと右に転換してサントス港に入る。此れが、今見てきたリゾート地とは雲泥の差。すすけ黒ずんだ港の倉庫群。初期移民の方々は、此れを如何感じたのか。何番ゲートに着岸したのかは忘れたけれど、当時の横浜大桟橋と比べても月とスッポンくらいの差を感じる。迎えに来てくれている人々、勿論日本人、日系人が大部分でしょうが、其の人々の色の黒さ、第一印象は何となく気迫が無いように見受けられた。特に若い女性の色の黒さ。沢山の苦労をされているんだなと言う感じを受ける。と、その中に、

どうも見たことの有る顔を発見。朝田君では無いか！彼は中学、高校《関東学院》、おまけに立教とまで、長い間の後輩。横浜の長者町にある古いミシン屋の息子次男坊。政府の海外実習生として、2年前からここに居ますとのことで、本当に懐かしい出会いの第一号になる。通関も、入国手続きも済まぬうちに、ちょっとコーヒーでも飲みに行きましょうと誘われ、まだ手続きも何も済んでいないと言うのに、「なに、日本人の顔をしているから大丈夫。誰も何も言いませんよ。」とのことで、のこのこと港の外に出て、薄汚いBar街。角の何処にでもある、「ちょっと一杯やるところです」、と言う所に行き、飲み物と揚げ物を御馳走になる。コーヒーを飲みたいと言ったら、「幾らでもどうぞ」と言う事。なんと、さすがにコーヒーの国ブラジル。何処の　Barでも、此れだけはただ“無料”とのこと。この習慣は1970年度の前半くらいまで続きましたが、現在は何処にでも有るんですが、全て有料になってしまった。この日は、こうして一日中港で入国手続き、荷物検査に追われ、夕方遅くまで掛かる。

全てが終わったのは6時過ぎ。其れからが、又、大変だった。後送荷物は迎えに来てくれていた安藤さん、50代の人“例の勝ち組のバリバリだったと後で知る”が、送り先輸送の手続き一切を済ませてくれ、手荷物を持ち、バスでサンパウロ行きの汽車の駅まで行き、汽車に乗りサンパウロへ。まだ何処に行くのかも聞いていない。何んの説明も聞いてい無いが、「まあ良いか、成るように成れ」と全て任せる事にした。

サンパウロ市は、この港から一気に800mを汽車で昇るらしい。約70kmを何時間掛かったかは覚えていないけれど、それなりに、チビ達は観察をしていたらしく、「太い綱で引っ張られて登ってきたんだぞ」と話をしていた。サンパウロ着。折角、暫くぶりの大都市との出会いも、余裕を持って眺める暇も無く、バスに乗り、何処へと言うと、此れから奥地に向かう汽車のターミナル駅に向かうとのこと。「なんだこの町に住むんじゃなかったのか」とがっかり。丁度、東京の上野駅に向かっているのと同じだなと思う。バスを降りて、汽車の時間に遅れないように荷物を担いで急ぎ足、やっと時間ぎりぎりに滑り込み、3等車より未だ酷い席に座る。座席は全て木製。此方の人の体系に合わせての設計でしょう。如何体を動かして見ても安定せず、悲鳴を上げる。「いったい何処まで行くんですか？」と聞けば「パウリスタ線のガルサと言う駅まで」と言う。「距離は何ｋｍぐらいですか？」と聞けば「500kmくらいでは無いか。時間は。まあ順調に行けば明日の朝早くには着くでしょう」と、全て返事は大まか。「そうか、此れでないと、此れからは、此処では普段の生活について行けないのかな」と弟たちと話す。しゅしゅぽっぽしゅしゅぽっぽしゅしゅぽっぽ、と、音だけは一人前に立てながら、頑張っている機関車。石炭ではなく薪を炊きながらの頑張り。しかし、急な上り坂に差し掛かると、今にも止まりそうになりながら「おーい誰か後ろから押してくれ」と、言いたそうなあえぎ具合。

戦後、お袋の里、秋田まで米を貰いに行き、あの満員列車の窓にぶら下がりながら煤煙をまともに浴び、煤だらけ真っ黒になりながら、横浜まで18時間くらい掛けて帰った時のことを思い出す。薪を焚く為、煤煙は無かったが、目をつぶると、そのときの光景が、其れこそ懐かしく思い出され、必死で家族の為と思い、担いで帰った米の重さ。15才だった肩には、ものすごく重かったのを思い出しながら、周りを見渡せば、全て異邦人。皆生活疲れをしたように覇気の無い姿。「俺は、少なくともこんな姿にはならないぞ」と、気合を入れるが、頭の中では、未だ切り替えが出来ておらず、空転するばかり。それでも、その内に疲れて眠ってしまったんでしょう。体中が痛く、それで目が覚めた。外は、既に夜が明けており、「もう直ぐに着きますよ」とのこと。窓から見える風景は、殺伐としており、温かみも何も無い。

ガルサの駅に降り立つ。駅とは名ばかり。いまの日本の無人駅。此れを、徹底的に汚くしたような物。其の建物と、鼻を突き合わせるように、建物が建てられており、其処に何でも屋、バール《立ち飲みや》、薬局、雑然と汚い店が並んでいた。其のバールで、「此れから未だ少しあるので、朝のカフェーをして行きましょう」ということで、洒落た言い方をすればカフェーオレでしょう。あまり綺麗でないマグカップのような物になみなみと注がれた物に、フランスパンにバターを塗った物を一つ食べる。昨夜の汽車の中では、いかにせん食べる気のしなかった、こちらの常食とか言うもの《Feijão=豆、Arroz=御飯、Bife=肉、Salada=野菜、》大きな皿に御飯、其の上に塩豆、肉が一切れ、トマトが３切れのった物。チビ達は「うまいぞ」と盛んに食べてはいたが、とんでもないものを連想してしまい、食べる気がせず、寝てしまった。しかし、米が主食だと言うのがわかり、一安心。

其の朝食に飲んだカフェー牛乳は、其の朝しぼった物が配達されると言うことで、なれない我々には脂肪分が多すぎ、下痢をすると後で知る。

「それでは、必要なものを買いに行きましょう」と、何でも屋に。「先ず、此れから働く為の道具を買ってください」と言われ、指示どおりの物を買う。Enchada=草刈鍬、コーヒー収穫用のRasteo=熊手、Peneira=篩い（丸い大きなもの80cm）鍬、熊手などは、全て自分で柄を付けろと言うように別売り。それに、食料の一分米、干し肉、干ダラ、塩、砂糖。勿論、味噌、醤油、などは無い。それらを手持ちの資金から買い、「それでは行きましょうか」と言う安藤さんの言葉に、「どうやって？」との疑問。「このバスですよ」と言われたのが、ジャルジネイラ。窓ガラスも無い旧式なバス。何でもあり、何でも運びます、と言う田舎の乗り合いバス。町をはずれ、どちらを見てもコーヒーの木以外、何も見えない砂の道を走る事一時間強。途中、小さな町と言うより、集落を２箇所通過、コーヒー林の中で降ろされる。

次の日からが、又、大変な事に成る。お袋に、「先ず台所を作れ」と言われ、流しも無い、水道の蛇口も無い、勿論ガスなどは考えても無駄。先ず、流し台を作る。横に、調理しやすいように板敷きのまな板兼用のスペース。其の横に竈レ

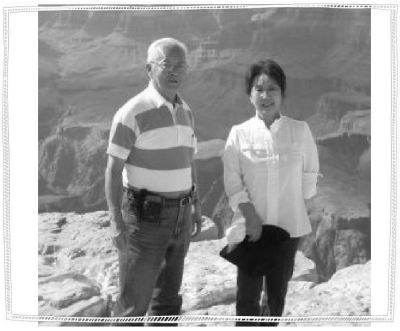
ンガを積み、焚き口を作り、上に市販の鉄板製《鋳物》で出来た、大中小の穴が縦に並んだ物。其々の穴に蓋がついている物を買い、煮炊きの出来るようにした。さて、何を作るという段になり、「何も無いよ」と妹。言われて気がつくが、荷物が着いていないので鍋釜箸何も無い。ボテコ、現地の何でも屋さん、と言っても、其処までは 20km もあり、とてもでは無いけれど歩いてなど行けない。翌日、安藤さんの息子さんが車で買い物に連れて行ってくれることになる。小生らは住居の造作。とりあえず、この駄々広い空間を如何するかと検討。直ぐ下の弟、関東学院で水船美術担当の先生の弟子のように可愛がられていた弟にレイアウトを任せる。先ず、此れを田の字型に区切り、親父お袋の空間、妹の空間、我々男の子用に。一つ残りを食堂兼台所に、と言う事で材料を使う事にして、先ず、今日は食べ物優先と言う事で、食堂兼台所、流し調理台用に材料を切り出す。先ず苦労をしたのが材料の硬さ、ユウカリ材の硬いこと。鋸の引くではなく押すという反対の動きになれるまで旨く切れなかったり、釘をじかに叩き込むと、其の硬い材料が直ぐに割れてしまう。いちいち錐で少し穴をあけてやる余計な作業が加わる。最後に風呂をどうするかと言うことになり、荷物が着き次第、其の中のドラムカンを利用する事にしたが、何処にするかで、又一思案。小屋を建てるか、家の中の一部にするかでひと悶着。一番簡単なのは、小屋を建てて脱衣所用の簡単な物をつけることで折り合い、特に妹から、外から絶対に見えないようにすることとのきつい注文が出た。

一部屋一日のペースでやるかと言う事で始める。台所水場に一番苦労をする。水道設置は後にして、とりあえず、水がめ方式を採用。流しを作る板の真ん中を切り、其処に少し大きめの箱型を作りつけ、とりあえず、其の真ん中に水抜きの穴を開け、水漏れしないように其の隙間全体に、コーヒー袋を解いた麻紐を苦労をしながら詰め込み、防水加工の真似事をしておいた。後には、5 ガロン缶を半分に切り、其れと交換したので、水漏れも無く自画自賛。（水道は、井戸の淵に櫓を作り、其の上に水槽を作り、其の底から台所までチューブを引き蛇口をつけた）食卓は、丸太を 4 本じかに打ち込み、其の上に板を渡した頑丈なものが出来た。椅子は、長いす“ベンチ風”を 4 つ作り間に合わす。部屋の仕切りは、先ずとりあえず扉なし、妹の所だけには板二枚分（60cm）の扉らしき物をつける。「少し狭いので、三枚分の物にしてくれ」と早速クレーム。「全部出来たらば変えてやる」と納得させる。他の入り口には、砂糖袋をぶら下げてカーテン代わりにし、天井の瓦の下側にも。コーヒーの袋か砂糖袋を張り、雨の飛沫が直接顔に掛からないようにする。此処で、又、チビ達からクレーム。「星も月も見えなくなった」と。

一応身近な所の処置が終わり、さて働くかと成った時には、到着時期 6 月 12 日が、既にコーヒーの収穫時期が過ぎており、いざ畑に出てみると、実は殆んど付いておらず、家族で一日 2 俵。本収穫時期の実の重さは判らないが、この時期のものは、詰め込んでも 40kg がやっとだったと思う。そんなこんなで「食っていく事も出来ないぞ」と話し合う。「しかし、此処に来てしまった以上、頑張る他無し」と自分に言い聞かせ、朝は、暗い内から出かけ、夜は星を眺めて帰る。此処で、又、諦めたはずの「なんで俺は」が、むくむくと頭を持ち上げ始める。この頃になると、皆の心の中に不安が積もりだし、燻り始めたと思う。

そんなある日曜日の午後の事、“トコトコ”と言う馬車のひずめの音がして、家の前に止まり、牧師さんが降りて来た。「日本から連絡が有り、玉城さんの家族が移住をして来て居ると聞き、訪ねてきました。さあお祈りをしましょう」と聖公会の牧師さんが現れた。「何処からおいで頂いたんですか」との問いに対しての返事は、一度に我々の心をつかむ物でした、「天国からです」の答えに、又、チビ達の反応「地獄で無くって良かった」此れで、一度に和み、その場で本当に久しぶりのお祈りをする事が出来た。実際には、グアインベと言う近くの町に有る聖公会の教会に居られる、ブラジル布教の先駆者である伊藤八十次牧師だと思う。名前の字が間違っていたら申し訳ないんですが、何せ昔々の事ですのでお許しいただきたい。其の日からは、苦しい時、むなしい時、悲しい時、何時も一緒にあったのは 3 番目の弟（歌が好きで、日本では藤原歌劇団に所属をしてテノールを歌っていた）の歌いだす賛美歌“山路越えて　一人行けば　主の手にすがるる　身はやすけし”“神共に居まして　行く道を守り”、後から後からと、歌い続けられた数々の歌に救われて、お百姓さんの真似事、裏の山の斜面を開墾し巾 50m、長さ 100m にさつま芋を植えたり、自分は、この耕地のサッカーチームに所属し、遠征試合に行ったりと、ある程度心に余裕を持てる生活を心がけました。練習は、週末みんなの仕事の休みにあわせて午後から、本稿地、この住まいからは 4km、本部の有るところの立派な芝のグランドで、此処で正式にブラジルサッカー連盟に登録され、多分、戦後初めての日本人選手では無いんでしょうか。新聞にも大分大きく取り上げられ、元日本選抜選手だと書かれましたが、技術面ではなかなか現地のゴールキーパーには追いつけませんでした。唯彼らより優れていたのは垂直ジャンプ力だけでした。今になり、其の新聞記事を探していますが、もう何処に行ってしまったのか判りません。孫達に見せて読ませて「ジージは」、と言いたいところですが。

其の年の年末近く、体験移住者生活に別れを告げ、コーヒー園を離れ、サンパウロに出ることになるんですが、其れからの事は又何時か書けたらばと思います。



ギリシャ神話の世界へのクルーズ

ワイス典子（昭和 48 年英文卒）

一昨年の 10 月に初めてクルーズにいきました。アテネからイスタンブールへの７泊８日間クルーズです。初めての船なので、胸わくわくでした。歴史は無知ですが、ギリシャ神話は読んでいたので、その土地をみることができるということで夢がひろがりました。アテネで２泊、女神アテナをまつるパルテノン神殿 と、近くにある Plaka オープンマーケットをまわりました。

全能の神ゼウスの頭を割って生まれてきたアテナは、知能と Art の神様ですが、大変意地悪な神様で、Arachne という機織りの少女の母親が、娘の織る機 はアテナのそれより美しいと言ったことに怒り、Arachne を蜘蛛に変えてしまい、それから蜘蛛がギリシャ語で Arachne になったそうな。 これもギリシャ語の Fear, Phobia と合わさって、Arachnephobia は蜘蛛恐怖症。Medousa も、自身の美しさはアテナより優るといったばかりに、髪の１本１本を蛇にかえられたとか。 何故そんな意地悪さんが神殿にまつられたかというと、アテナイ国にオリーブの木をあたえて国が潤ったからだそうです。

さてアテネからいよいよ乗船。 Capacity700 人の小さ目の船といっても、7-8 階建ての大きなビルくらいの船で、全室バルコニーつき Tub、Shower つきで、アテネで泊まったヒルトンよりバルコニー分広く、ルンルンで夕方に出発。
翌朝、アガメムノンの墓のある Mycenee に到着。ガイドさんは、 女の子の名前でイエス様の母マリアとトップを争うヘレンさん。ヘレネはスパルタの王女で、トロイ戦争のきっかけになった、絶世の美女。クレオパトラや小野の小町みたいな美女の代名詞のギリシャ版。ヘレネは、数ある求婚者のなかから、ミケーネ国王アガメムノンの弟と結婚するのですが、絶世の美男トロイの王子パリスと恋に落ちて駆け落ち、ミケーネを中心とするギリシャとトロイと戦争になります。そこで、例のトロイの木馬でトロイが全敗し、アガメムノンはパリスの妹でトロイが滅びる予言をした。これも、美女のカサンドラを連れてミケーネに帰国したところを妻とその情夫に殺害されます。Brad Pitts が主演した TROY では、アガメムノンが TROY で、アキレスのガールフレンドに殺されていたので、 ガイドのヘレンさんもさすが、見ていてびっくりしたとおっしゃっていました。 ギリシャ神話の面白いところは、この後、美男子パリスもこの戦争でヘレネを奪い返されたうえ、大怪我をして、どんな怪我でもなおしてしまう Ex-girlfriend のもとへ戻るのですが、当然拒絶されて死んでしまうという、どこまでも 落ちが待っているところです。

話がつい神話のほうにいってしまいますが、この Agamemnon's Tomb というのは、ドイツのシュリーマンが発見しました。シュリーマンという人は、少年時代にホメロスの Iliad を読んで、大人になっても、そのころは物語でしかなかったトロイ戦争を信じ、事業で成功してからトロイ遺跡をさがし、とうとう見つける。ところが亡くなってから後すぐ、この Agamemnon's Tomb は、どうやら、Agamemnon より３世紀ほど前のものらしいことがわかります。けれども、物語が歴史であったことを証明したことには変り無い訳です。引退してから本当にやりたかったことを始めるなんて、日本の伊能忠敬もですが、素晴らしい。
この Tomb もピラミッドのように、どうやってあの重い石を運んだかの方法もそうですが、そもそもデザインそのものも、かなりの知能、数学力があったと考えられるそうです。2000 年 BC ですから、謎だらけで、解明するには費用と人力、時間がかかるでしょう。

三日目ミコノス、四日目サントリーニ、ただただ奇麗でした。

五日目 Rhodes は、世界七不思議の Colossus Of Rhodes があったとされますが、今は残っていません。300 年 BC 頃ですから、本当にあったのかも謎ですが、本当にあったとしても不思議ではないのかもしれません。Colossus はありませんが、イスラム勢力と戦ったキリスト教騎士の Knights' Castle Of Rhodes には、 POW を閉じ込めた Dungeon があったりして面白かったです。ローマ帝国が分裂して東ローマになり、何度もさまざまの軍に攻撃され、聖ヨハネ騎士団が乗っ取り島の頂上に城を建て、エジプトやオスマンの攻撃を一度はさけたけれど、1522 年、日本でいったら応仁時代が終わって戦国時代に入った頃、オスマンに負けてしまったそうです。

六日目 Kusadasi は、トルコ語で、Bird Island という意味だそうです。Port からバスで Ephesus に行きました。Ephesus は、アレキサンダー大王ヘレニズム都市から共和制ローマの支配下になり、アントニウスとクレオパトラも訪れたそう。図書館、劇場も 跡が残っていて、特に会議室の席がトイレになっていて、昔はトイレをしながら、会議をしたそうな。

今は草ぼうぼうですが、昔は市場だった Area があって、ギリシャ語で Agora といいます。主に奴隷が売り買いされたそうです。人ごみ恐怖症を Agoraphobia というのも、そこからきているということです。
Kusadasi を夕方にでて朝になれば、ポスポラス海峡をはさんで、左にトルコ ヨーロッパ側、右にトルコアジア側を見ながら、イスタンブール終点です。

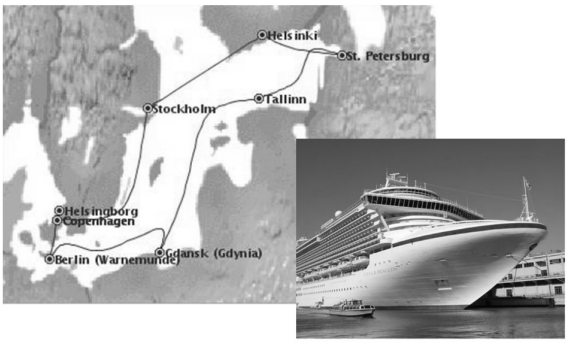
イスタンブールは、古代ギリシャ Byzantium からローマ帝国 Constantinople、そしてオスマン帝国の首都になった為、キリスト教会がモスクになった美しいアヤソフィア、そして Blue Mosque も一見の価値有り。

普段から旅行をするほうではないけれど、昔々国鉄の宣伝で “旅は心のショッピング“というのがありましたが、本当です。船旅に関しては、船酔い等心配しましたが、ちょうど飛行機にずっと乗っている感じ。バルコニーにでれば Fresh Air だし、食事が First Class でした。船から港までの Tender（ボート）も頻繁で便利ですし、お部屋は一日２度はお掃除してくれます。次は何時のことかわかりませんが、子供たちと一緒に、Baltic Sea か、南米にクルーズしたいと思っています。船も売られて、違う会社の、違う名前になっても、又乗ると、古い友達に会った気になるんだよね、って誰だか言っていましたが、そんな事もあるのかも知れません。

クルーズ：バルト海の旅

草野レクサ泰子（昭和 48 年英文卒）

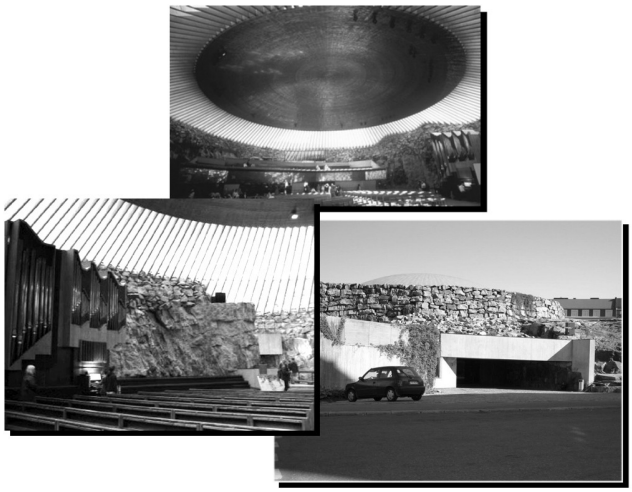
クルーズ会社に勤めだす前までは、クルーズの旅など考えてもいなっかたのですが、やはり一度ぐらい体験してみなければと思い、バルト海 10 日間の旅を選びました。



海上に浮かぶ巨大なホテルに缶ずめになるような気がして、閉鎖恐怖症になって地上に降りたくなったらどうしようという不安が正直ありました。いざ乗船してみると、2600 名の乗客にクルーが約その半分の数がいるとは思えぬほどの空間があり、混み合ってる感じはまったくなく、2600 名いても、ダイニング、カフェテリア、ツアーなどでしょっちゅう顔を合わせる人がいたりして、大勢の中の孤独感もなく、勿論揺れもなく、水上にいることを忘れそうでした。

このクルーズで特に気に入ったのがヘルシンキとサンクトペテルブルグです。

ヘルシンキの港沿いのオープンマーケット。野菜、果物，絵画、アクセサリーといろいろあるのですが、そこで食べられるニシンのフライの美味しいこと。その上６月下旬だったので、大きなラーズベリーとイチゴが山積みされていて、ニシンのあとは、ラーズベリーのデザートでお腹を満足させて、タクシーとバスで、石の教会、テンペリアウキオ教会にむかいました。自然の床岩を切り出してつくられた、素朴なつくり、フィンランドの生んだシベリウスの曲が流れる質素なインテリア、 内装も石の壁でしたが、音響効果は素晴らしいとか。今度機会があったら、ぜひコンサートのあるときに来てみたいですね。



次は、ロシアのヴェニスといわれているサンクトペテルブルグ。ここでは船が二泊したので、ほかの街より時間があったのですが、なんといっても観るものが多く、エルミタージュ美術館だけでも 3-4 日必要なのではないでしょうか。ここでのハイライトは、閉館後のエルミタージュのツアー。15 名ほどの希望者を集め、人気のない静まり返った館内を案内され、40 分位廻ったら、大きな部屋に椅子が用意されており、シャンペンが出て、エルミタージュ音楽院のメンバーによる弦楽器のコンサートがツアーの締めくくりでした。芸術の繁栄した、ロマノフ王朝の時代に浸った夕べでした。

10 日間あっという間に経ってしまいましたが、クルーズで良かったのは、スーツケース荷ずくりせずに、毎日違う国、街に移動出来て、レストラン探しに歩き回らないですむことでしょうか。この旅は親子三代、20 歳から 80 歳までが一緒の旅行でしたが、それぞれが楽しめ、いい思い出の残る旅となりました。

理想をいえば、クルーズでさあーっと一通り見て回り、後日気に入ったところをゆっくり訪れてみる。まだ実現していませんが、またいつかゆっくりコペンハーゲン、エストニアのタリンも歩いてみたいと思っています。

海外立教会から
オーストラリア
メルボルン立教会

佐藤裕喜 メルボルン立教会会長
（昭和58年法学卒）

南半球に位置するオーストラリア、その第二の都市がメルボルンです。オーストラリアがイギリスから独立した当初は、メルボルンは暫定首都で、政治、経済および文化の中心でした。その後、政治の中心は新しく作られた首都キャンベラへ、そして経済の中心はシドニーへ移りましたが、文化の中心は、今尚メルボルンがその地位を保っていると言えます。

メルボルンの立教会は、比較的新しい集まりで、1990 年代に入ってから活動を始め、対外的に認知されるようになったのは、2000 年になってからの事です。現在の会員は、12 家族 35 人、その内おおよそ半数は、日系企業の現地事務所に勤める方々で、数年単位の在留予定です。そしてのこりの半分は、当地で永住されている方々です。

先週末、都合のつく方が集まり、メルボルンから車で 1 時間半ほどの距離にある、Upper Yarra Reservoir Park（大きな貯水池のある自然公園）でキャンプを楽しみました。私を含め先行隊は金曜日から出掛け、後発隊は土曜日からの参加です。静けさの中で過ごす時間は格別です。テントに訪れる野鳥や小動物、そして森を覆いつくす美しい夜空、そんな中での友との語らいは何にも代えがたいものです。今回のキャンプは、心温まる思い出となりました。写真は、キャンプ場で撮ったものです。

四季があり、緑豊かな山河に恵まれ、素晴らしい都市計画の下で徐々に発展してきたここメルボルンは、居心地がとても良いところです。1 月 18 からは、テニスの 4 大タイトルの一つ全豪オープンが、また 3 月下旬には、自動車レースの最高峰 F1 の 2010 年の第 2 戦が行われます。皆様、一度メルボルンに遊びにお越し下さい。そして是非、当地の立教会をお訪ね下さい。大歓迎致します。

TOWN & GOWN 主催　クレイアートの会

谷上知美（平成 8 年法学卒）

11 月 29 日（日）に孫会長のお宅にて、小林陽子さん（平成 8 年史学科卒）を講師に迎え、TOWN&GOWN 主催『クレイアートの会』が開催されました。13 名の立教会メンバーが集まり、ポットラックランチでの談笑の一時もあわせて、大変楽しい一日となりました。

クレイアートは、『焼かない』『手も汚れない』『絵の具での色付けもしない』という特別なクレイ（粘土）を使用して、初心者向けという「バラのブローチ」作成に挑戦いたしました。先生の見本作品を前に、全員が同じブローチを作成したのですが、色選びや花びらの形、花の大きさなどに参加者の個性が表れ、それぞれ素敵なブローチができあがりました。

またポットラックは、参加者の皆様お手製のご馳走が並びました。メニューは、サラダ、中華おこわ、サンドイッチ（サーモン、エッグ、ポテト）、春巻、生野菜スティック、ポットロースト、かぼちゃの煮物、きんぴら、肉団子、マカロニグラタン、パンプキンコロッケ、インゲンの炒め物、オレンジチキン、洋梨のコンポート、カップケーキ、みかんの全 18 品。

さらに、孫会長のご好意で、ビンテージ物のワインを開けて乾杯をし、ホリデーシーズンにふさわしい華やかな気分を満喫できました。

楽しい一日はあっという間に過ぎ去り、皆様ご自分の作品を大切に胸に抱き、帰路につきました。
クレイアートは想像していた以上に難しく、しかし熱中できる大変楽しいものでした。また次の機会に、新たな作品に挑戦したいです。皆様どうもありがとうございました。

＜お知らせ＞

2 月 28 日(日) の Fresno Pacific University との試合では、山中良一氏の立教史散歩に書かれてあります、1927 年に第二応援歌を立大に伝承された、銭村ケンイチ氏の御子息の銭村ケンソウ氏、並びに、平松サトシ氏（両氏共に広島カープで活躍された）が、スペシャルゲストとしていらっしゃいます。そして、翌 3 月 1 日(月) のフレズノ市 United Japanese Christian Church での、UJCC、Fresno-Kochi Sister City Committee、並びに、Nisei Baseball Research Project 主催のブレックファースト・レセプションに参加する為のミニ・ツアーも計画されておりますので、参加をご希望される方は、孫恵美会長まで御連絡下さい。

編集後記　今回の「LA 立教会だより」第 6 号は、急遽、発行日が早まってしまった為、記事の執筆をお願いした皆様に、新年早々から、何度も催促をしてしまうことになってしまいましたこと、心からお詫び申し上げます。「立教史散歩」の転載を快く許可して下さいました山中一弘様、映画のスクリプトの様なストーリーを 3 日間で書いて下さったサンパウロの玉城良一様、40℃の猛暑の中、ビーチに行かずに書いて下さったメルボルンの佐藤裕喜様、ワイス典子様のギリシャ神話の世界への旅、草野レクサ泰子様のバルト海クルーズ、そして、谷上知美様の Town & Gown のレポート、皆様、本当に有難うございました。今回の編集では、時間を越えて、世界中を旅して廻ったような気持ちにさせられました。　（坂本計洋 記）